核保有国のリーダーたちへ

坂本 理紗

もし私があなたと会って話をする機会を得たならば、私はこう問いたい。

「好きな食べ物は何ですか」

的外れな質問に思われるかもしれない。そんなことをわざわざ聞きに来たのかと、笑われるかもしれない。質問の真意は何かと疑われるかもしれない。しかし、私はただ、あなたの好きな食べ物が知りたい。これが私流の"友人への第一歩"だからだ。

言うまでもなく、私とあなたでは生まれ育った環境が異なる。暮らす地域の地理的条件が異なれば、慣れた気候も異なるだろう。気候が異なれば、そこで育つ植物も、暮らす動物も異なるだろう。食生活も異なるだろう。触れてきた文化や価値観、話す言葉も異なる。このように、私とあなたの相違点を挙げようとすれば、きりがない。しかし、互いに別個の人間なのだから、違いがあって当然である。生まれてから死ぬまで、全く同じ経験をする人などいないと考えるほうが自然である。

私たちの相違点の一つに、社会的立場がある。私は学生であり、あなたは一国のリーダーである。この違いは、他者への影響力の違いでもある。このことについて、核兵器使用の観点から整理してみたい。

① 核兵器を使用した場合、地球上に壊滅的な影響がもたらされる

② 核兵器保有国のリーダーは、核兵器使用を決断・指示することができる

まず、①については私たちの双方に関係する事実である。核戦争はもとより、一度の核実験でもその影響は甚大であることを過去の経験から人類は学んでいる。次に、②についてだが、私はこれに直接的に関わっていない。なぜなら、先に述べたように私は一学生であり、一国のリーダーではないからである。この事実から、私が核兵器の使用を決断することはできず、①の状況は発生し得ないという結論が導かれる。しかし、あなたの場合は異なる。あなたには、あなたの発する言葉ひとつで①の状況を発生させる可能性がある。あなたは、あまりにも大きな力を持っている。

さて、はじめの話題に戻ろう。もし、私があなたと会う機会があったなら、私はあなたと友人になりたい。私たちが友人として語り合うとき、学生や政治家といった肩書は必要な

くなるのではないだろうか。友人という関係性があるならば、国際情勢における複雑な関係性など忘れてもよいのではないだろうか。「今この時に、地球上で生きている人間」という私たちの確実な共通点を大切に、国や立場を越えた共同体として互いを思いやるべきではないだろうか。

とてもではないが、今の私には一国のリーダーを務められるような力量はない。知識も能力も経験も、あなたのほうがずっと豊富であろうと思われる。あくまで想像に過ぎないが、一国のリーダーとして生きることは簡単ではないだろう。そうした事実に対して、私は純粋に尊敬の念を抱いている。だからこそ伝えたい。あなたの背負うものは、あまりにも大きすぎると。核兵器使用の決定権を持つことは、地球の、人類の未来を背負うことでもある。それを一人の人間が背負うべきではない。少なくとも私には負えない。自分の一言で地球が壊れるかもしれないという生活を送りたいと思う人は少ないだろう。また私は核兵器に反対しているから、あなたと共にその重荷を背負うことはできない。しかし、降ろすことはできると考える。これ以上、核兵器を増やさず、核軍縮を進めることがそれに値するだろう。大きすぎる荷を降ろしたとき、あなたはようやく心休まるのではないだろうか。

同じ一人の人間として、同じ時に、同じ地球に暮らす友人として、私はあらゆる他者を思いやりたい。私と出会うすべての人を幸せにしたい。あらゆる不信や衝突を解消し、信頼と友情によって世界平和を実現したい。私のこの願いは、学友などの身近な相手であろうと、あなたのような地理的にも心理的にも距離のある相手であろうと揺るぎないものである。